

東西宗教交流学会・国際大会の報告

花岡永子

北米シアトル市において、二〇〇〇年八月五日（土）から八月十二日（土）まで、東西宗教交流学会の国際大会が開催された。本大会の会場は、バシフィック・ルター大学であった。この大学は、森の中の大学と言いたいような緑の芝生や樹木の多い、しかもキャンパスの広い、大自然に恵まれた環境にある大学であった。そこで約一週間の国際大会は、北米、特に開催大学の終始友好的な雰囲気の中で行われた。

日本の東西宗教交流学会からは、これまでの国際大会においてと同様に、討論グループが派遣された。今回の本国際大会のテーマは「仏教・キリスト教、そして全世界の癒し」であったが、その中で日本の討論グループのテーマは、「靈性、自然そして自己」であった。日本からの討論グループでは、講演者は四人で、レスポネントは最終的には五人であった。日本の討論グループの会合は、八月七日から四日間、毎日午前九時から十一時三十分まで開催された。このプログラムは、講演約一時間、レスポンス約三十分、その後約一時間

の質疑応答であった。（以下の報告文の人名は「氏」と略称を使うことをお許し頂きたい。）

第一日目の八月七日（月）の午前には、奥村一郎神父の「靈性の遍歴——仏教からキリスト教へ——」の講演があり、これに対するD・ミチュル氏のレスポンスがなされた。二日目の八月八日（火）の午前には、小林圓照氏の「仏母マリーヤ夫人とマリア——二つの聖胎に係わる靈性と自然——」の講演があり、これに対するP・スワンソン氏とJ・フレデリックス氏のレスポンスがなされた。三日目の八月九日（水）の午前には、花岡永子の「靈性の問題——二十一世紀に向けて——」の講演があり、これに対する遊佐美智子氏のレスポンスがなされた。日本の討論グループの最後の開催日であった八月十日（木）の午前には、渡辺孝氏の「ユング心理学における自己と自然」の講演があり、これに対する村木詔司氏のレスポンスがなされた。いずれの講演やレスポンスにも活発な質疑応答がなされた。北米やドイツやその他の国々からの

参加者からの討論参加もあり、今後のこの国際大会の益々の発展が望まれた。講演内容については、既に日本での二回にわたる東西宗教交流学会で発表済みであるので、この報告では、極く簡単にそこでの印象のみを述べておきたいと思う。

第一日目の「靈性の遍歴——仏教からキリスト教へ——」では、奥村神父の生涯のご生活そのものが、正に靈性によるものと思われるという、北米の参加者からの感想が印象的であった。二日目の「仏母マーヤー夫人とマリア——二つの聖胎に係わる靈性と自然——」では、やはり北米のカトリックの聖職者からのマーヤー夫人についての大きな関心に基づいた様々な質問を聞き、マーヤーとマリアにおける靈性と自然の問題の興味深さに改めて気づかされた。三日目の「靈性の問題——二十一世紀に向けて——」では、やはり北米のカトリックの聖職者からの、絶対無とは何かと様々な方向から質問される熱心さに感動せざるをえなかった。これが、筆者の心から消え去ることのない今回の討論グループでの印象である。四日目の「ユング心理学における自己と自然」には、北米の東海岸の他大学での国際学会での発表があったために、筆者は残念ながら参加できなかった。しかし、帰国後、参加者の皆様から伝え聞くところによると、やはり日本からの参加者以外の方々からも活発な質問があったということであった。

討論グループでの全体的な印象は、キリスト者側からの参

加者や質問が多く、仏教者側からの参加や質問がそれ程活発には見られないことであった。討論グループ全体についての感想は、各宗教や各宗派を越えての、全世界的な規模での救いや癒しに対するキリスト教や仏教の側からの働きかけが、もう少し活発になされてもよいのではないかということであった。本大会は、仏教とキリスト教との相互理解からまず始まっているのであるが、やがては、双方の相互理解から、学問レベルにおいてのみならず、肉 (sax) と魂 (pneuma) とからなる「身体」(soma) や、その姿としての心身一如の「心」やその働きとしての「靈性」の全レベルにおける、両世界宗教から各宗教間や宗派間の壁を越えた、全人類の救済や心の癒しに働きかけ得る新しい芽生えが大いに望まれるのではないか。

日本からの討論グループの他には五つの討論グループがあり、毎日開催されていたが、午前中の討論グループはすべて同じ時間帯に開催されていたので、相互に参加するためには、自らの討論グループを欠席しなければならぬので、講演者や司会者には他の討論グループの様子を知る機会が少なかった。全体の六つの討論グループのテーマは以下のようであった。○社会的・環境的暴力の実利的アスペクト ○内面的対話——仏教とキリスト教の瞑想 ○日本の東西宗教交流学会——靈性、自然そして自己 ○靈性と地球憲章 ○仏教とキリスト教における正統思想の役割 ○二〇〇〇年の東西宗教

交流学会の討論グループの対話の纏め。これら六つの討論グループの内の最後のものは、そのテーマの示しているように、五つの討論グループ全体の纏めであり、大会委員長のイングラム氏によって、最後の十二日の九時三十分から十一時三十分までの二時間行われた。この纏めのポイントは、以下の五点について行われた。一、全世界の癒しとは何か。二、全世界の癒しへの貢献において、東西宗教交流学会は現在どの辺りに位置しているのか。三、何がなされており、また何がなされていないのか。四、我々のそれぞれの宗教的伝統と教団の一個人的参加者として、また、一つの東西宗教交流学会として、全世界の癒しに対する障害を克服するためには、どうすればよいか。五、全世界の癒しの為の働きにおける本学会の将来的役割を、本学会はどのように先取りすべきであるか。本学会の次の国際会議である二〇〇四年には、この問題に関して本学会はどのように対処したらよいか。

右の最終の纏めには、他の学会に出いたために筆者は、残念ながら参加できなかつた。右に述べた討論グループ以外のプログラムにも簡単に触れておくと、毎朝七時三十分から八時までの三十分間の、また夕方には五時三十分から六時三十分までの一時間の、「宗教的・行・瞑想・祈り」の時間が設けられていた。夜は、八月五日から十一日まで毎夜八時から十時まで、大ホールで、全員出席での講演会が開催された。その際には、尺八やパイプオルガンによる音楽の演奏や集団

による祈りも織りなされていた。また、八月九日以外の午後二時から五時までは、「午後のパネルとシンポジウム」と「午後の個人発表」の部となっていた。勤務大学のご都合で残念ながら日本の討論グループのレスポンスには間に合わなかった延原時行氏は、この午後の部で個人発表された。八月九日の午後、希望者を二つグループに分けて、大型バスによる観光（一方や山登りで、他方は名所旧跡巡り）がった。

残りの紙面では、この学会について自由に書かせて頂くことにしたい。著者は、八月四日に会場のパシフィック・ルター大学のキャンパス内の宿泊施設に到着した。その日の夕方、既に十年以上前からアメリカの東西宗教交流学会と同じ編集委員会の仕事をしてきた関係で顔見知りであった、本大会委員長のパ・O・イングラム氏に、大学の校庭でお目にかかった。早速、翌日の五日の朝七時にイングラム氏のご夫人を食堂でご紹介下さるとのこと、翌朝は珍しく筆者は早起きをした。初めてお目にかかったイングラム夫人は、本学会ではイングラム氏の助手として受付のお仕事をなさると伺った。その二、三日後にやはり食堂でご紹介頂いたご令息も、本大会のお手伝いをなさっていて、欧州とは相違した民主的な雰囲気、大変暖かな人間性を感じた。

大会委員長のお話によると、本大学は、一八九〇年にドイツとスカンディナヴィア半島諸国の協力で開学され、現在三万四千人の学生が在学しているとのことであった。

本大会では、かつて日本に在住したことのある神父様方にお目にかかり、日米の文化についてかなり立ち入ったお話も出来た。八月七日にはJ・カブご夫妻様も来られ、大会は一段と賑やかとなった。筆者も、約二年振りでご夫妻にお目にかかり、暫くお話をさせて頂いた。この日には、以前日本の東西交流学会のメンバーでもあられた屋宜和夫氏やアビト氏ご夫妻に久し振りでお目にかかれた。八日には、ドイツからM牧師ご夫妻も参加され、久し振りにドイツ語で日米独の文化について議論することができた。宿舎では、リタ・グロス氏や沢山の女性の参加者の方々とも対話ができた。また、二十年程前の妙心寺での修行時代にアメリカから留学してきていた学生さんで、現在では早や有名教授であるI氏にも大学の校庭で二十年振りで会い、米国の宗教の様子について伺ったりもした。

昨夏の北米の北部は一九三四年以来の寒さで、北米の南部はやはり一九三四年以来の暑さとかで、北部での大会では素晴らしい避暑生活も経験できた。

